

ウィリアム・ブーグロー『聖母子』1888年

曲目解説

Ave Maria

アヴェ・マリア

J. S. Bach（1685–1750）／ Charles Gounod（1818–1893） バッハ／グノー

曲目解説

Ave Maria アヴェ・マリア

Méditation sur le premier Prélude de J. S. Bach ／ バッハの前奏曲第1番による瞑想曲

J. S. Bach（1685–1750）／ Charles Gounod（1818–1893） バッハ／グノー

成立	1853年（器楽曲『瞑想曲』として出版）、1859年（『アヴェ・マリア』の歌詞付きで出版）
もとになった曲	バッハ『平均律クラヴィーア曲集』第1巻（1722年）の第1曲、ハ長調の前奏曲（BWV 846）
調・拍子	ハ長調・4分の4拍子・Andante semplice（歩く速さで、素朴に）
この楽譜	Mutopia Project（Yann Leprince 浄書、パブリックドメイン）の旋律に、篠笛の運指を付記

作曲者

伴奏はバッハ、旋律はグノーという、150年近く時代の離れた2人の合作です。バッハ（1685–1750）は、ドイツのバロック時代を代表する作曲家で、
ライプツィヒの聖トーマス教会のカントルとして生涯を終えました。

シャルル・グノーは、パリに生まれたフランスの作曲家です。1839年にローマ大賞を受けてローマに留学し、システィーナ礼拝堂で聴いたパレストリーナらの古い教会音楽に、深く心を動かされました。帰国後は一時、聖職者を志して神学を学んだほど、信仰の篤い人でした。

歌劇『ファウスト』（1859年）、『ロメオとジュリエット』（1867年）で名声を得たほか、
ミサ曲などの宗教曲も数多く残しました。バチカン市国の国歌（教皇賛歌）も、グノーの作曲です。

曲の成り立ち

土台になっているのは、バッハの『平均律クラヴィーア曲集』第1巻の最初の前奏曲です。この曲集は、24のすべての長調と短調で、前奏曲とフーガを1組ずつ並べたものです。最初のハ長調の前奏曲は、
和音を同じ形に崩して1小節ずつ鳴らしていく、素朴で澄んだ曲です。その初期の形は、
バッハが長男のために作った鍵盤の練習帳（1720年）にも見られます。

1850年代のはじめ、グノーがこの前奏曲を伴奏にして、上に即興で旋律を付けて弾いたところ、
のちに義父となるパリ音楽院のピアノ教授、ピエール・ジマーマンが、それを書き留めたと伝えられています。

1853年、ヴァイオリン（またはチェロ）、ピアノ、ハルモニウム（足踏みオルガン）のための
『バッハのピアノ前奏曲第1番による瞑想曲』として出版されました。同じ年には、
詩人ラマルティーヌの詩を付けた歌も出ています。そして1859年、ラテン語の祈り「アヴェ・マリア」
を歌詞にした版が出版され、これが世界中に広まりました。

「アヴェ・マリア（めでたし、マリア）」は、天使ガブリエルがマリアに受胎を告げたときのあいさつに、とりなしを願う祈りを加えた、カトリックで最もよく唱えられる祈りのひとつです。なお、シューベルトの『アヴェ・マリア』（1825年）は、まったく別の曲です。

グノーの曲には、バッハの自筆譜にはない1小節（原曲の22小節と23小節の間）が入っています。
19世紀の楽譜に見られる小節で、シュヴェンケという音楽家が、和声の進み方を「直した」
つもりで加えたものとされています。そのため、バッハの前奏曲は35小節ですが、
グノーの曲の伴奏は36小節です。この楽譜では、27小節がその小節にあたります。

曲調と聴きどころ

伴奏のバッハの前奏曲は、1小節に1つの和音を、同じ形の分散和音で淡々と鳴らし続けます。
グノーの旋律は、その和音の移り変わりに寄り添って、長い音でゆっくりと動きます。この楽譜の冒頭には、「瞑想的な気持ちで」(avec le sentiment contemplatif) と書かれています。

旋律は、和音が変わるたびに、そこで一番美しく響く音を選んでいくように書かれています。
バッハの和声の中に、もともと隠れていた歌を、グノーが掘り起こしたような音楽です。

曲の流れ （小節番号は、この楽譜の小節番号）

小節	内容
1〜4	伴奏だけで、バッハの前奏曲の最初の4小節を弾く（前奏）
5〜12	伴奏が前奏曲の頭に戻り、旋律が、長くのばすミから静かに歌い出す。cresc. で少し高まっては、pp に引く、という息づかいを繰り返す
13〜23	和音が遠い調へと移ろうにつれ、旋律もしだいに音域を広げる。22小節で f の小さな山をつくり、また静まる
24〜28	伴奏の低音が、ド、ファ、ファ♯、ソ、ラ♭と、半音ずつせり上がり、和音の緊張が増していく。旋律は「cres-cen-do molto」と、1小節ごとに一段ずつ高く、強くなる
29〜36	伴奏の低音が、ソ（属音）に長くとどまる。その上で旋律はさらに高まり、33小節の tutta forza（全力で）で、曲の頂点を迎える
37〜41	1回目は、37小節から5小節へ戻って、もう一度くり返す。2回目は結びへ進み、低音がドに落ち着いて、祈りを閉じるように静かに終わる

音楽のしくみ （かんたんな音楽理論）

調　ハ長調

ドを主音とする長調で、調号はありません。伴奏のバッハの前奏曲は、
1小節に1つの和音を分散和音で鳴らします。和音が変わるたびに、
旋律の音もその和音の中の美しい音を選んでいます。

拍子　4分の4拍子

1小節に4分音符が4つ。伴奏は16分音符の分散和音で、1拍に4つずつ刻みます。

低音が半音ずつ上がる所

24〜28小節では、伴奏のいちばん低い音がド・ファ・ファ♯・ソ・ラ♭と動き、緊張が高まります。
旋律も一段ずつ強くしていくと、和音の流れと一緒に盛り上がります。

篠笛の楽譜と調について

　同じ曲を、全体の高さを同じ幅だけ上げ下げして書き直すことを「移調」といいます。
篠笛は1本ごとに高さが違うので、笛に合わせて調を選ぶと、無理のない指づかいで吹けます。チューナーの「基準 A」は、ラの音を何ヘルツに合わせるかのことで、ふつうは 440Hz です。
笛に合わせて伴奏の基準を少し下げると、笛を無理にカらずに音程がそろいます。

楽譜	内容
標準の運指版	ハ長調（原調）。運指は「一＝ド」として付けています。笛だけで吹くなら、何本調子の笛でも同じ指で吹けます（鳴る高さは笛によって変わります）。伴奏（A＝440Hz）と合わせるときは、一 がおよそドの笛（目安：八本調子前後）を使います。
六本調子版	六本調子（古典調）の笛のための楽譜です。ハ長調（原曲の高さのまま）、伴奏（A＝440Hz）にそのまま合わせる。実測した六本調子の笛で、×の運指やメリ・カリがいちばん少なく吹ける調を選び、音ごとのメリ・カリの量も書いています（笛によって前後します）。

藤舎名玄　2026